古典と教育

角倉康夫

1

アーヴィング・バビットとP・E・モアとは、ニュー・ヒューマニズムの運動における僚友として、根本的信念を同じくしたことはいうまでもない。しかし二人の間には差異もある。むろん、この二人の場合、同じであるということの方が、異なっているということよりも、重大ではあろうが、さりとて、後者の事実を見のがすこともできない。石田憲次博士は、『エマソンとネオ・ヒューマニズム』の中で、そのような二人の差異を指摘、例証されている。[1] たまたま、筆者は、モアの古典の教育的価値を論じる文章を読んでいたとき、「ここにも違いがある！」と思われるあるささやかな箇所にぶつかった。そのとき、そう思ったのは、石田博士の文章の印象が強く頭にのこっていたからのことで、あるいは筆者の思いすごしだったのかもしれない。しかし、とにかく、それをしおに、問題を「古典と教育」ということに限局して、バビットとモアとの差異を考えてみることにした。「古典と教育」といえば、バビット、モアの二人との連関において、また、筆者のせまい知識の範囲内で、すぐ念頭にうかぶのはT・S・エリオットである。バートン・ラスコー（Burton Rascoe）はエリオットのことをニュー・ヒューマニズムの聖パウロと評している。[2] バビットとモアとをならべてみる。それは一つの風景だ。そこへ、エリオットを配してみる。すると、風景はまたちがってくる。エリオット的な立場からすれば、バビットとモアとの差異などは問題とならず、二人はつまり同

じカテゴリに属するものとして、同じ批評にさらされなければならないであろう。このような三人の相対的位置とでもいうべきものを眺めてみようというのが小論の目標である。

2

バビットの著作を読んでいて感じられることの一つは、彼が男性的な人であるということだ。じめじめしたところがなく、からっとしている。言いたいことはずばりと言ってのけ、それを、これでもか、これでもかという調子で、ぐいぐいと押してくる。彼自身の用いている言葉をかりていえば、彼は‘virile’で、‘vigorous’で、‘backbone’のある人だ。これは単に筆者の主観的印象にとどまるというものではないようだ。オースティン・ウォレン（Austin Warren）はその著、*New England Saints* を数名の人に献じているが、その中に、バビット夫妻の名が見える。してみると、ウォレンはバビット夫妻と大へん親しいとか、何かそういう特別の関係にあったように察せられるのだが、彼のバビット論は公正で、バビットをべたぼめにするということはない。そのウォレンによれば、バビットは人となり、男性的、つまり、強健、自主独立的、率直、独断的、争い好きで、ジョンソン博士に似ている。[3]

男性的であるということはたしかに長所だ。しかしまた、反面において、短所ともなり得る。とりわけ、文学、芸術の仕事にたずさわる人の場合、致命的な欠陥となるかもしれない。理想的な批評家は男性的美徳と女性的美徳とを兼ねそなえていなければならないとはバビットの説くところだ。しかし、彼自身が著作において強調するのはむしろ男性的美徳だ。当時の文学、芸術の浪漫主義、印象主義的傾向に抗議するための言論だったから、ということもあろう。が、より多くは、彼自身の資性の然らしめるところであろう。「バビットは賢明な受動性、感受性、精妙さなどというようなロマンティックな美徳には同情を示さない」とウォレンは述べている。[4] こういう性質の人だからこそ、バビットは文学、芸術がわからないのだ、という批評をこうむるようなことを書いたり、話したりするのであろう。

バビットはほんとうに文学、芸術にたいする感覚を欠いていたのだろうか。F・R・リーヴィスは、バビットは文学、芸術にたいしてつんぼ・めくらで、それでいて結構、いい気になっており、且、自分の無能を全然理解していないとか、バビットの感受性は未発達かそれとも枯渇してしまっている、[5]といっている。これは、毒舌とでもいうべき、情容赦のない批評であるが、もう少しおだやかで、同情的と思われる見方もある。ウォレンの意見では、「審美的には、バビットは未発達であるか、あるいは、興味関心をもたない。[6]」ウイリアム・ヴァン・オウカナー（William van O'Conner）は、バビットだけではなく、ニュー・ヒューマニスツ全般についてであるが、「想像力をはたらかせて象徴的技巧を研究するということはできないか、あるいは、すすんでそうしようとはしない」と述べている。[7]これらの見方にしたがうと、バビットが文学、芸術にたいして全くのめくら・つんぼであったと断定することは必ずしもできない、ほんとうに、文学、芸術にたいする感覚がなかったのかもしれないが、あるいは、感覚はあっても、興味関心が文学、芸術からそれて、他の方面にむいていたのかもしれない、ということになる。石田博士はこの問題についてバビットを積極的に支持し、バビットが浪漫主義を非難攻撃するに急なのは、彼に浪漫主義文学を鑑賞するための感覚が欠けているからだとの批評にたいし、なるほどバビットは文学の思想的内容の検討に重点をおき、形式を形式、表現を表現として礼讃するようなことはないにしても、彼は鈍感なるが故に非難攻撃するのでは断じてない、そのことは、*Masters of Modern French Criticism* 一巻を成心を除いてひもとけばわかる、と論じておられる。[8]バビット自身も、詩の言葉を考察する場合、「真の詩人の手にふれられて言葉が獲得するかもしれない神秘あるいは魔力」を強調すべきであると述べ、また、「詩の神々しい幻想」にやどる真実性に言及している。[9]こういうことから察すると、バビットには文学の感覚など全然なしと断ずるのは事実に相違するのではないかと思われる。もちろん、この種の強調、言及とても、観念的なものにすぎず、批評や鑑賞の実際とはなんのかかわりもないといってしまえば、それまでである。

バビットが文学、芸術を解し得るかどうかはさておき、一つ確実なことは、彼が文学、芸術を文学、芸術としてよりはむしろ、ひたすら道徳的見地から取り扱おうとしているということだ。「バビットは芸術をほとんどもっぱら道徳的基準によって判断した……彼は厳密な意味での文学批評を実践したことは滅多になかった……彼は第一義的にモラリストであった」とウォレンはいっている。[10]「真の芸術、文学は一全体としての人間性と生命的（ヴァイタル）な関係をもっている……それは単なる洗練された形式の享楽、美的感受性のくすぐりではない」と語るのはモラリスト・バビットである。[11]

バビットの文学、芸術にたいするこのような態度は彼の古典にたいする態度にもあらわれるはずである。彼は古典の中でも、もっぱら、浪漫的、神秘的要素のもっとも少ないものを読んだとのことであるが、これは、ウォレンもいうように、意味深い事実である。以下、「古典の合理的研究」[12]（*The Rational Study of the Classics*）というエッセイについて、古典の教育的価値についてのバビットの所見をたずねてみよう。

バビットは古典を文学として研究することを奨励すべきだと主張する。この場合、「文学として」ということを額面通りにうけとってはならない。ここにはきわめてバビット的な含みがある。バビットのこの主張の背後にあって、この主張をなさしめたのは、当時のドイツ風の文献学的、言語学的古典研究である。世はリサーチの時代で、特殊研究、微視的研究が続々とあらわれ、山積している。リサーチを弁護する人は、リサーチによって重大な成果をあげることは必ずしも可能でないとしても、リサーチのあたえる訓練はそれ自体、価値があり教育的であると主張する。バビットはそういう主張に多分の真理が含まれていることは認める。精密なリサーチによって、研究者は緊張し、限界内で仕事をし、それによって、集中力と特殊の事実を確実に把握する能力とを増進させることができる。その意味で、リサーチをどんなに高く評価しても、高きにすぎることはない。漫画新聞かエロ小説しか読めない学生にはこの上ない良薬である。問題は、「正確さ」、「科学的方法」を強調するあまり、「広さ」を犠牲にするところにある。古

典の研究においては、言語学を不当に強調することによって、うるおいのない、辞書的な心性を助長すべきではなく、それを防ぐために、古典を文学として研究すべきである。これがバビットの主張である。

このような次第で、バビットのいわゆる古典の文学的研究は、普通にいわゆる文学的研究ではない。それは、象牙の塔にひきこもって、古代作家の中に繊細優美な慰藉の源泉を求めようとすることではなく、広汎な、生命的な仕方で古典を現代生活にむすびつけようとすることである。ここから古典の一つの効用がうまれてくる。すなわち、古典をこのように現代生活とむすびつけようとすれば、古典作家を孤立した一現象として研究するだけでは充分ではない。おのおのの作家を一人だけ切り離して研究した後には、その作家を、古代の世界から現代の世界にまでひろがっている文学的、知的伝統の中におき、その一環として研究しなければならない。この伝統の連続性は研究者の心に過去にたいする正しい感情と尊敬とをうえつける。かくして、現代への隷属からの解放が古典の研究から得られる主要な利益の一つにかぞえられるであろう。

古典はこのようにして人を現代から解放してくれるが、さらにまた、自我からも解放して、より高いものへと向わせてくれる。バビットによると、近代文学は、ペトラルカ以降、多かれ少なかれ感傷的であり、ルソー以降、病的なほど主観的な調べをもち、現代文学には「神経症の」と形容するほか仕方がない性質があらわれはじめ、瘴癘の気が立ちこめている。これに反し、古典文学は人を元気づけるさわやかな空気をもっている。近代文学の大部分は人が感傷的、浪漫的な夢想にふけることを奨励する。ところが、古典文学のもっともすぐれたものは、われわれの内に、ある感情の状態やある神経の状態を惹き起す傾向はあまりない。それはむしろ、われわれの高い理性と想像力――それは自我から脱出する道をわれわれに与え、われわれをして普遍的生命への参加者たらしめる能力である――に訴える。かくして、古典文学はその研究者を自我から脱却せしめるという意味において真に教育的である。純粋の古典精神は自らを高い、非個人的な理性への奉仕に捧げられているものと感じる。したがって、それは抑制と訓練との情感

を抱き、つりあいと普遍的法則との感覚をもつ。われわれの行為をこの高い、非個人的な理性にますます緊密に順応させることによって、それはわれわれを、道は違うが、宗教と同じゴールに導いてゆく。この正しい理性の指導と支配との下に、われわれの能力のすべてを完全に、調和的に発達させることによって、それはわれわれを高め、われわれが、肉体や精神の束縛の中へ、感覚の泥沼の中へ、傲慢、孤独な思考力によってつくり出された怪奇な迷路へ再びおちいることを不可能とするであろう。

バビットによれば、大学においては比較的少数の標準的な学科を選択し、その教授に努力が集中されなければならない。そして、そのような標準的学科の中核をなすのが、上述のような教育的性格をもった古典である。

3

モアはまず第一にモラリストだ、とバーナド・ブランダーⅡ（Bernard Blander Ⅱ）はいう。[18] その点、バビットと同じである。詩人が卓越しているかどうかは、作品の形式のみによって決まるのでなく、作品がいかに多くの真理を、いかに多くの賢明な反省を具体的に表現しているか、つまり、いかに正しい人生の批評を提示しているかによって決まる、と考えるモアである。しかし、同じくモラリストといっても、モアはバビットと違うところがある。

モアはバビットよりも感受性のつよい批評家である、とヴァン・オウカナーはいう。[19] さきに、バビットは古典作家のうち、浪漫的、神秘的要素のもっとも稀薄なものをもっぱら読んだとのウォレンの言葉を引用した。その際、じつは、ウォレンは、「友人のモアと違って」とつけ加えているのである。してみると、モアは、バビットと違って、浪漫的なもの、神秘的なものにも趣味、嗜好をもっていたというわけである。ラスコーはバビットとモアとの違いをこう記している。「バビット教授はたまたまハーヴァードの比較文学の教授をしているけれども、文学には全然興味を抱いていない。彼は文学はどのようにしてつくられるかを知っていないのである。この点については彼は大へん素朴

で、偉大な、優雅な傑作をつくり出すためには、アリストテレスの規則を守り、内的抑制力をはたらかせ、礼儀正しく、紳士でありさえすれば、それでよいのだと考えている。彼は文学を積極的に嫌悪し、弁証にのみ興味を抱いている。彼は、僚友のヒューマニストであり、卓越した弁証家であったモア教授とは次の点で違っている。すなわち、モアは彼独特の仕方で文学をたしかに好む。彼は詩、戯曲、小説、随筆の本を読むことを楽しむ。[16]」といって、ラスコーはモアにたいし別に好意的であるのではなく、モアがプラトンやウィッチャレーを読むとき、彼が発見するのはプラトンやウィッチャレーではなく、彼自身の似姿だといっている。それにしても、とにかく、モアは文学を楽しむことができる人であるということにはなる。ついでながら、ウィッチャレーといえば、バビットは、少なくともカレッジの課程では、ウィッチャレーをとりあげるのは適当でないという趣旨のことをけがらわしいものにふれるような調子で述べている。[16] 石田博士はモアが詩人的天分の持主であり、創作にも心をひかれた人であることを述べ、バビットとモアとを次のように比較しておられる。「バビットは批評家以外の何ものでもなく、彼の著作が悉く論争的意図をもって書かれたもので、自己の論旨を読者の心肝に徹するように次から次へと古今東西の証拠を挙げて殆ど息つく暇も与えないようなのが常である。その間に抒情詠歎などのはいる隙はなく、自己を告白または披瀝することが絶えてないと言ってよい。これに比べると、モアの遣り方は遙にしなやかで余裕のあるものである。[17]」

以上、諸家の説を援用しつつ、モアとバビットとの相違について述べた。さて、筆者がシェルバーン・エッセイズ(*Shelburne Essays*)第九集の「知識階級者の指導力」(*Academic Leadership*)というエッセイを読んで、最後の一節にいたったとき、上述のようなモアとバビットとの相違にふと想到した。それは次のような次第である。

「知識階級者の指導力」というエッセイは、社会の建設にあたって、教育はいかなる任務をもつか、また、その任務遂行のために、各学科はいかなる相対的価値をもっているか、ひいては、健全なカリキュラムのバックボーンとなるべき学科は何か、そういう問題について考察したものである。

教育は鍛練の手段を包含していなければならない。鍛練はいかなる学科からも多かれ少なかれ得られる。しかし、ある学科は他の学科よりも容易に、且、効果的に鍛練を与えることができる。

英文学はどうか。英文学の教授があまりに美文学的取り扱いに堕するおそれのあることはバビットの言及するところであるが、モアもまた英文学の教授の鍛練的価値をあまり高く評価しない。[18] 英文学を通じて思想的訓練をあたえることのできる適当な教師があれば別だが、英文学のコースはえてして、無味乾燥な年代や名前の暗記に堕するか、さもなくば、美しい章句についての浪漫的な感情の誇大な表現に終り勝ちで、いずれにしても、バックボーン的学科たる資格にかけている。

フランス語、ドイツ語はどうか。これらの国語はむずかしい。また、その精神に入りこむためには努力がいる。したがってその教授はある程度の知的体操となるが、鍛練としては十分でない。

自然科学はどうか。自然科学中、数学と物理学とは厳密な注意と手堅い推理とを要求し、鍛練的教育の一部分をなす資格は十分である。しかし、他の数学的ならぬ自然科学の鍛練的効果は疑わしい。

このように述べてきてモアは古典語のもつ鍛練的価値を強調する。ラテン語、ギリシャ語が全くむずかしいこと、これらの言語が高度に組織化された構造をもっていること、ギリシャ語、ラテン語と、近代におけるその派生語とが意味の範囲において非常なへだたりがあるから、同義語る見つけるためには念入りな探求が必要であること、なれた考え方をすてて非常に異なる世界に入るため、自分を高める努力をしなければならないこと、こういうことが頭脳を強壮にする体操の役割をつとめる、とモアはいうのである。モアは古典語を学ぶ学生が、学ばない学生よりも、また、古典語を学ぶことが長ければ長いほど、よい成績をおさめることを種々の統計をあげて示すのであるが、これは、石田博士もいわれるように、「最初からよい学生がかような課程を選ぶからでもあって、凡てを古典語、文学の訓練の結果と速断するわけにゆかぬ」[19]であろう。また、古典語の勉強をするような学生は元来が骨を惜しまぬ勤勉家

であるということもあろう。現に、バビットは、東部のある大学では古典のコースをとるのは主としてくそ勉強家たち（grinds）であったとのある委員会の報告を引用している。[20]

上述したような意味での鍛練をあたえるほかに、古典はまた、碇泊すべき港を知らず、波のまにまに、あてどもなくただよっているような現代社会の指導者としての能力を涵養する力をもっている。

知識人は知的貴族階級として、社会が同等主義的民主政治または金権政治、寡頭政治のいずれにも堕落しないように指導しなければならない。知識人はその教育によって、広い意味でも、狭い政治的な意味でも、民衆の指導者でなければならない。そのような指導者階級を育成するのが大学の任務である。

さて今日、知識人はそれぞれの専門の殻に閉じこもって、連帯の意識をもたない。しかも、千差万別ということは美点であり、幸福は集中から生まれるのではなく、種々雑多な興味関心がぶっかりあって火花のように生じるものであるとの俗見を否定する勇気をもたない。これでは、共通の目的のために協力することは望むべくもない。共通の目的のために協力するには、共通の思想の世界、共通のものの見方をもたねばならない。

そこで、大学は種々の知的職業に共通する背景として、すべての学生に共通の知的訓練を与え、共通の思想とイメージとを持たせるようにつとめるべきである。そのためには、いくつかの学科をえらんで、これをカリキュラムの中核としなければならぬ。そうして、このカリキュラムの中核となるべき学科は、モアによれば、古典を中心とし、それに哲学と数学的な自然科学とを配したものである。

古典が他のいかなる学科にもまして、鍛練に資することは既述のとおりであるが、今の場合、古典はどのような意味で、そのような重要な地位を教育において占めることができるとモアは考えるのであろうか。

現代の社会は分裂、解体の傾向にある。そういう社会の指導者としての知識人がもつべきものは、秩序と従属という神の定めの下に配置された最下位のものから最上位のものにまでいたる存在の全階層を一つの崇高なヴィジョンと

して眺め、しかも、それらすべての中心にある不変の真実を見のがさない、そういう高次の想像力である。それは、同じシェルバーン・エッセイズ第九集の「自然の貴族階級」(*Natural Aristocracy*)というエッセイ中の言葉をかりていえば、人間歴史の長い過程を一つの確固としたヴィジョンとして把握し、歴史における永遠的なるものと一時的なるものとを見分けることのできる想像力である。このような高次の想像力のヴィジョンをわがものとし、すぐれたものにたいする嫉妬をすてて魂を浄化され、時間の破壊力よりはむしろ保存力に共感するようになってはじめて、人は知的貴族階級の一員となることを許されるのである。そうしてこのようなヴィジョンを与えてくれるものがまさに古典である。古典の最大の効用はそこにある。

ここまでのところは何とも思わず読んできたのだが、さきに書いたように、このエッセイのしめくくりのところにきて、ハッと立ち止まって、モアとバビットとの差異について考えさされたのである。それはこんなことが書いてあるからである。「以上、私は議論を古典の公共的側面とでもいうべきものに限ってきた……古典が個人に与えるあの無尽蔵の喜びと慰めは、人生の幾多の転変を通じて、ギリシャ・ローマの作家を友とし、助言者と仰いだ人のみが十分に知ることができる……」何でもない、平凡な言葉だ。この些細な、ありふれた言及をとりあげて、モアとバビットとの差異を云々することは妄念だと一笑に付されるかもしれぬ。だが、バビットが古典から個人的な喜びと慰めとを得たとしても、ここでモアのしているように、それをわざわざ筆にするようなことがあるだろうか。あるとはどうも思われない。モアは「オックスフォードの逆説」[21](*The Paradox of Oxford*)というエッセイの中においても、古典があたえる峻厳な訓練とともに、その美しさ、その与える喜びにところどころで言及している。もっとも、強調は前者におかれているが、後者への言及をも忘れぬところに、バビットとくらべると、より「しなやかな、余裕のある」モアの性情がうかがえるといえないであろうか。

教師をしていた頃、夏休みにはメーン州の海岸にゆき、ホメーロスの永遠の海が見え、波の音の聞えるところで、

イリアスとオデュセイアとを交互に読んだ幸福を回想する文章がモアにはある。[22] その筆致はいかにも楽しく、なつかしそうである。教師をやめてから、彼のいわゆる schoolman's privilege of leisurely vacations を回想すれば、それはとりわけ楽しく、なつかしい回想ともなるであろうが、このモアの回想はホメーロスの「人を飽きさせることのない快楽」(uncloying pleasure) について語る際に引きあいに出されるのであって、彼のホメーロスにたいするしみじみとした愛情がここには一ぱいに溢れていると感じられるのである。

「夏休みと古典」といえば、バビットもまた、学校がある間は、「天に書かれた永遠の法則」の新鮮な例証を提供する現代の書物や雑誌を主として読むが、夏の間は、彼にとってはリフレッシュメントの永遠の源泉であるホメーロス、ピンダロス、ソフォクレース、ホラティウスに帰ったということである。[23] この場合、リフレッシュメントという語は意味深くはなかろうか。そのとき、バビットが古典から感得するものを喜びと慰めと名付けるとしても、それはモアのいう喜びと慰めとは質的に差違があるのではなかろうか。モアのそれをより審美的とすれば、バビットのそれはより倫理的であり、健康すぎるほど健康なものではなかろうか。

4

エリオットには「現代の教育と古典」[24] (*Modern Education and the Classics*) というエッセイがある。彼はその中で、現代教育における古典の地位についての考察をおこない、「古典の根本的な弁護」をこころみる。

古典語教授を重視した教育の伝統を墨守しようとする感傷的な保守主義の立場。知識人の社交生活には必須であるから古典語を教えようという立場。議会での演説を古典からの引用で装飾する教養をあたえる目的で古典教育をほどこそうとする立場。これらの古典弁護の立場はいずれも根拠薄弱なものであることは論をまたない。また、一見もっともらしいヒューマニズムの哲学による古典弁護も、同様に薄弱な根拠しかもたない。ある条件の下や、ある環境に

おいてはいかに立派でも、要するに、相対的な重要性しかもたない目的、そのような目的から古典の弁護は切り離されなければならない。そうして、ある永遠なるものと永遠的に結びつけられなければならない。ここにこそ「古典の根本的弁護」がある。さてその「ある永遠なるもの」とは、エリオットによれば、歴史的なキリスト教の信仰である。キリスト教の信仰とヨーロッパ人が共通に継承している古典語とはときほぐすことのできない、あざなえる縄のごときものである。ヨーロッパの文化はキリスト教文化であり、逆に、伝統的な信仰はその知的活力を高水準の古典語の学識によって支えられているのである。ヨーロッパが起死回生すべきであるとするならば、今そこに見られる混乱に秩序があたえられるべきであるとするならば、それはキリスト教の信仰と古典語という二つの基盤の上に立ってはじめて可能である。この意味で、古典語教育は壮大な歴史的使命を担っているというべきである。

上述したとおり、エリオットはヒューマニズムの哲学の立場からの古典弁護は根拠薄弱であるとする。これはバビット、モアの古典にたいする態度への批判ととることができる。ここでエリオットのいうヒューマニズムの哲学とは、自由主義の前進の終る直前に、その前進をはばむための、おくれた、後衛的な、その上、それ自身半ば自由主義化した軍勢によってたたかわれている戦のことである。他方、エリオットは、「アーヴィング・バビットのヒューマニズム」（*Humanism of Irving Babbit*）というエッセイにおいて、バビットのヒューマニズムを十九世紀の自由主義的プロテスタント神学の産物――副産物と規定している。ここでエリオットのいうヒューマニズムの哲学と彼の規定するバビットのヒューマニズムとは別物ではないのである。

ヒューマニズムの哲学の立場からの古典弁護、つまり、バビット、モア的立場からの古典弁護は、エリオット的な立場からすれば、結局は、自由主義的な立場からの古典弁護ということになるのであるが、そのような立場はいかなる性質のものであり、いかに批判されなければならないであろうか。

エリオットによれば、教育にたいする態度には、自由主義的、過激主義的、正統主義的の三つがある。これら三つ

の態度を古典の教育とくみあわせるとこうである。古典の教育をキリスト教の信仰とむすびつけようとするのは正統主義的態度。過激主義的態度は古典の教育などは無価値なものとして、てんで頭から問題にしない。自由主義的態度は古典語の教育もエトルリア語の教育も教育的価値においては甲乙なしとする。この態度はすべての学科を同等の教育的価値をもっているものと見なすからである。

バビット、モアが抱く古典の教育的価値についての観念はエリオットのいう自由主義的態度のそれでは決してない。いなむしろ、そういう自由主義的態度を否定しようとするのがバビット、モアの態度である。二人とも、青少年の教育において、ある学科が他の学科よりも効果的であることを認め、効果的な学科を健全なカリキュラムに編成しようとする。無差別的、無責任的ではなく、選択的、責任的である。このような態度から、古典を特に重視し、これをえらび出し、ぬき出して、中核的な教育手段たらしめようとするのである。にもかかわらず、それも、エリオット的な見地からすれば、自由主義的態度のなれのはて、あれもこれもと種々雑多な知識、思想を注入して、浅薄皮相な円満具足人をつくろうとする教養主義的態度と一般ということになるのであるだろう。何故そうなのか。歴史的なキリスト教の信仰に支えられていないからだ。バビット、モアの古典教育の理念は道徳的、倫理的であっても、宗教的ではないのだ。エリオットによれば、およそ教育というものは究極において宗教的でなければならない。宗教的であるということは抹香の香をただよわせること、教義をおしつけることではなく、人をその生命の本源にかえらせること、人の人格、悟性、理性、感受性、想像力等々とかかわりあいをもち、人を言葉のもっとも真実な意味において全人とすることだろう。とすれば、宗教的でないということは、人間の形成を目的とする教育という仕事においては致命的な欠陥だ。

こう考えてきて、さて、バビット、モア、エリオットとならべみると、エリオットにとっては、自分がその中で生まれ、はたらき、死んでゆく歴史的生命の中にかえり、みずからの生命を清新、鮮烈にして、再びそこから出てきて、その歴史的生命の持続にあずかろうとする、その契機をなすのが古典であるが、バビット、モアにとっては、古

典はいまだ、われわれに対するものとして、われわれの外にあり、われわれを教え、われわれを導くものであり、彼らと古典とのつながりは、エリオットの場合とくらべると、なお、外面的、無機的、抽象的たるをまぬがれぬ。バビットはなるほど、古典を単に過ぎ去ったものとして眺めることには反対で、古典を現在と結びつけ、生命的、内面的に取り扱おうとし、その態度を「創造的模倣」(creative imitation)と名付ける。しかし、その形容詞にもかかわらず、その志向の正しさにもかかわらず、「創造的模倣」とはあまりうますぎて、いまひとつ、弱々しい、よそよそしいひびきをつたえる表現ではなかろうか。問題は「創造」という言葉の内容である。「創造的模倣」ということが「盲目的でない模倣」ということに、さらに、「単なる模倣」ということになり下るおそれなしとしない。バビットはまた、現在のわれわれが過去にたいすべき態度として、「想像力による過去の解釈」(imaginative interpretation of the past)を説きすすめる。過去にたいするこのような態度とても、「過去をば、現在とはっきり相違する点をもった、過ぎ去ったものとしてのみならず、非常に生き生きとしていて、現在と同じくわれわれにとって現在するものとして見ることのできる」エリオットの「創造的眼光」[26]にくらべると、過去の把握が綺麗事で、低次元的であるとの感じをうける。そこにあるのは、ともすれば、過去をつきはなしておきながら、過去の重さを骨の髄にドシンとうけてよろめき、よろめきながら立ちなおって、また過去にとっくんでゆく、そういう過去との格闘というよりはむしろ、過去との甘いなれあいとでもいうべきものであるように感じられる。問題は「想像力」の質である。

「一」と「多」との融合がバビットやモアの哲学の目ざす究極であった。ロレンス・ハイド(Lawrence Hyde)はそのニュー・ヒューマニズム論の中で、古典主義者たちがあのように強調する「一」と「多」との融合はわれわれが芸術家になるときはじめて成就されるのだといい、[27]ニューヒュー・マニスツには「一」と「多」との融合は不可能であることを暗示している。バビットは、そのような融合を彼自身において成就し得るとは考えていなかったようだから、貴殿にはそんな芸当はとてもできませんよ、といわれたって、なんの痛痒も感じないであろう。それにしても、

バビットが芸術家でないことはたしかだ。バビットは教師にすぎない。（彼のために弁ずれば、彼は教師たることを恥じなかった、[28] 権威をもって教えたえらい教師である。[29]）教師バビットに芸術家エリオットを配すれば、その間に、といっても、ぐっとバビット寄りに、モアの座があるといえようか。別の言い方で三人を比較すれば、バビットはモラリストだ、モアもまたモラリストだ、しかし、彼は少々詩人だ、エリオットもまたモラリストだ、しかし、彼は同時に詩人であり、また文芸批評家だ。そうして、ここで大切なことは、このようなエリオットの三重性格は、深瀬基寛教授の言葉を借りれば、[30] 道化役者の三態変貌ではなくて、何か一つの突きつめた捕捉しがたい問題の球体感覚に徹しようとする激しい努力から生まれているということだ。R・P・ブラックマー（Blackmur）も、想像力、同情心、感受性の欠如あるいは貧困の故に、バビット自らがいたり得なかったところへ、彼のもっともすぐれた弟子たちは彼をふみ越えてゆかざるを得なかった、エリオットはそういう弟子の一人だ、といっている。[31]

〔註〕

① 同書一七八―一八一頁。
② *The Critique of Humanism* ed. by C. Hartley Grattan, p. 119.
③ *New England Saints*, p. 153.
④ *Ibid.*
⑤ *The Commmon Pursuit*, pp. 238-9.
⑥ *Op. cit.*, p. 153.
⑦ *The Age of Criticism*, p. 109.
⑧ 前掲書一五五頁。
⑨ *The New Laokoon*, p. 52.
⑩ *Op. cit.*, p. 158.
⑪ *Literature and the American College* (A Gateway Edition), p. 78.
⑫ *Op. cit.*, p. 145.

⑬ *Literature and the American College* におさめられている。
⑭ *The Critique of Humanism* ed. by Hartley Grattan, p. 282.
⑮ *Op. cit.*, p. 101.
⑯ *Op. cit.*, pp. 126–7.
⑰ *Literature and the American College*, pp. 133–4.
⑱ 前掲書　一八〇頁。
⑲ エリオットも後出の「現代教育と古典」というエッセイの中で、青少年の教育において価値の少ない学科の一つとして英文学をあげている。
⑳ 前掲書　一八〇頁。
㉑ *Literature and the American College*, p. 99.
㉒ シェルバーン・エッセイズ第九集におさめられている。
㉓ *The Demon of the Absolute*, p. 21.
㉔ *Op. cit.*, p. 146.
㉕ *Essays Ancient and Modern* におさめられている。
㉖ *Selected Essays : 1917–1932* (1932), p. 50.
㉗ *The Prospects of Humanism*, p. 108.
㉘ Austin Warren : *Op cit.*, p. 151.
㉙ *Ibid.*, p. 149.
㉚ 『エリオットの詩学』二十四頁。
㉛ *The Lion and the Honeycomb*, p. 146.